

スタッフ

製作 山高しげり
脚本 柳沢類寿
監督 金子精吉
撮影 佐藤昌道
照明 岸田一彦
音楽 岡村和夫
録音 木村国一
編集 藤岡弘司
助監督 沢登祥恵
製作進行 村上雅英
キャスト
上野班長 坂本武
妻 敏子 高野由美
長男 健一 桂川典子
二男 康次 山森甲二
二女 良子 朝川良枝
神田(若い工員) 朝川良枝
近江班長 三遊亭月生
寄席の落語家 その他多数

解説

都市の大工場従業員の生活は、今は昔とはすっかり変っている。労務のやり方も、ヒューマンリレーションとか、提案制度とか、家族の生活も、工場見学をはじめ、家族計画、食生活の改善など新生活の波が打ちよせている。
こうした新しい工場の従業員の喜びや悩みを、正面から描くのではなく、土曜日の午後から月曜日の朝まで、つまり或る日曜日を中心に、一班長(おやじ)家族の喜びや悩みを、ユウモラサに描いて、大きな現代の工場従業員とその家族に明るく笑いとしみじみとした共感をさそうのが、この映画の目的である。
今日の工場従業員はもちろんその生活にふれたいと思う農村の人びとにも、学生徒にも、青年にも、ひろくこの映画をおすすめしたい。

ストーリー

ここは巨大な造船工場の船台の上で、折しも響きわたる予令に、作業の手をどめて、班長の上野が皆の給料を受取りに行きかけると、ガラン／＼と材料の落ちる音——眼をかけている部下の神田の不注意だった。

近江班からは、ほんとうに買傷者が出た。小山という年輩で、夫婦げんかで妻が里に帰り家庭がごたついていた。それを聞くと上野は「このごろボンヤリしている神田が気になってきた。」

上野は神田をさぞつて、給料日で賑かな生協の売場で一杯やりながら、神田の悩みを聞いた。神田は近くブラジルの分工場へ派遣されることになっているが、恋人の両親が果して承諾するかどうか……恋人の父(実は上野)にもハッキリはいいかねて悩んでいた。上野はそれと知らず「なかに体当りで口説くんだよおれに任せとけ」といけしけるように元氣をつけた。

家に帰った上野は、明日の日曜日に珍らしくも家族を世界の名所を巡るシネラマにさぞつた。しかし子供たちはそれぞれに自分の予定があつて、柄にもないことをいうおやじを相手にしない。けつきよく小学三年生の良子と五年生の康次のテンピラ連中と動物園へ行く約束になつて、ガツカリする。

翌朝、小さい連中にひつはられて動物園に来た上野は、モノレールを降りたところで、模擬試験があるからとシネラマ行を断った長男(中学三年生)が友達といふのにビツクリする。もつとおどろいたのは、その長男が康次や良子を友だちに頼んで、父を引つぱつてスケートリンクをおごらせたり、かねてねらつていたらしい食堂へ案内したことだ。おまけにそこへ長女の節子(二十オ)までが現れて父をひきつぐのだった。

はは、これがお前たちのシネラマか、と上野はじめて気がついたが、昨夜友だちと約束があるといつていた節子の案内は、今日の生きたシネラマの主演俳優の上野のドギモを完全に抜くものだった。公園で待っていたのは部下の神田だった。娘の結婚を約束した相手として紹介されたのである。ブラジル行きの承諾を娘が

ら求められて、上野はうなづてしまった。

やつと、「お母さんとも相談して」と切りぬけると、次が寄席の前で、待つていたのは妻の敏子だった。若い二人がよく来た寄席だった。

二人は、愉快な落語と賑やかな客の笑いの中で、娘たちの結婚についてポツリポツリと話合つた。神田は見込みのある奴だとは思つていたが、娘を現場の人間にやろうとは上野は考えていなかった。

敏子も、娘にブラジルへ行かれては淋しいとおもつた。

しかし、二人が寄席を出て、深夜の勝岡橋を渡って帰るころには、食しくとも梅のなかつた自分たちの結婚にひきくらべて、娘と神田もさびしい現実を打ち勝つと俾せをつかんでくれるにちがいないと思ふのだった。

この巨大な勝岡橋は、二十年前敏子が嫁いできた頃、若い工員だった上野が鉄を打つたものだった。神田もアマゾン河に新しい勝岡橋をつくるんだと、大きなをみている。さびしい現実を説いて夢を否定するよりも、若い二人の夢を育ててやろうと上野も敏子も思ふようになってた。

翌朝、康次や良子は元氣よく学校へ、節子は勤めに飛出してゆく。上野も要に見送られて勤めに出ようとする。節子を持つていた神田のえしやくが眼についてた。

朝の光を浴びた船台の上では、近江班長が、昨日は小山夫婦の中をまどめた、現金なもんであいつ今日は張切つて働いてる、と笑つて語る言葉に、上野も微笑をささわれて眼をやると、神田はつきものがとれたように爽々しく働いている。

おやじの日曜日

全三巻

協賛・石川島重工業株式会社

黒白三巻 三五ミリ 七八二米
一六ミリ 三三三米
上映時間 二九分
画格 四五・〇〇〇円

製作・母子と桜映画社